

# フィールディングの宗旨とその背景

能 口 盾 彦

## I

リチャードソンとの比較から、フィールディングとキリスト教の関わりは稀薄との印象を与えるようだが、必ずしもそうとは言えない。『トム・ジョウンズ』第三巻第四章で、作者は“宗教”を“道徳”と照らし併せ、“for I would not willingly give Offence to any, especially to Men who are warm in the Cause of Virtue or Religion...and which do, indeed, alone purify and enoble the Heart of Man, and raise him above the Brute Creation.”<sup>1</sup> と、その重要性を説いている。事実、小説家とキリスト教の因縁浅からず、父方の祖父、John Fieldingは英国国教会の牧師であった。祖父ジョンはDesmond伯、George Fieldingの五男として生まれ、ケンブリッジ大学クイーンズ学寮を卒業の後、Piddletownでのvicar（代理司祭）を駆け出しに、Salisburyでcanon（司教座聖堂参事会員）を、後にDorsetでarchdeacon（大執事）等を歴任し、英国国教会内で確固たる地位を得た。後年、ウィリアム三世のchaplain（宮廷牧師）を務めたことでも知られている。<sup>2</sup> このジョンの三男、エドモンドが小説家の父である。朱牟田夏雄はフィールディングの古典愛好は祖父ジョンの血を受け継いだ故と結んでいるが、<sup>3</sup> 父方の祖父に言及する研究者や評伝家は限られている。その謂れはフィールディングの家系で軍籍に身を置く者数知れず、父エドモンド自身、幼年期には牧師となるよう期待されたが、軍人の道を選んだ。エドモンドが妻セアラの実家とそぐわなかったのも彼の天職がもたらした可能性が少なくない。セアラの父Henry Gould卿は高名な裁判官（Judge of the

Queen's Bench) で、エドモンドの破天荒な行状に義父母が反撥を覚えたのかもしれない。天衣無縫さ、節操無き彼の言動が故に、フィールディング家と宗教とは無縁の印象を与えたのかもしれない。いずれにしても、エドモンドの存在が母方の祖父母の介入を呼び、相対的に父方の親戚の影を薄くした事は否めない。

精神面を含め、孫が祖父の有り様を踏襲し得るかの問題に関し、祖父の家庭内での存在を考慮に入れなければならない。家族形態の変遷と密接な関係が指摘されるであろうし、国や地域性、時代の推移にも留意せねばならぬ。本論の主旨に照らせば、18世紀英国での家父長制度にふれねばならないが、家父長制の遵守は、『クラリッサ』での祖父の専制的存在に象徴されるであろう。しかしながら財産権や相続権以外に、果たして祖父が孫の行く末を決定し得るであろうか。現在ほど職業選択の自由が保証されない当時であっても、孫の意志決定に祖父が如何なる影響力を行使し得たであろうか。当時であつてすら、祖父ジョンが息子エドモンドに果たし得なかつた例もある。科学的な観点から隔世遺伝等と解釈される例に、性格や容姿の合致が挙げられるが、職業選択等の後天的事例には充当されぬのではないか。一方で、血縁による解釈が諸子の賛同を得やすく、フィールディングの母方の実家の扱いがその例と言えよう。小説家フィールディングがロンドンを中心とした地域の治安判事として活躍したことから、グールド家との因果関係が頻りに指摘されるのである。フィールディングが1737年6月に施行された“The Licensing Act”によって劇作家の道を絶たれ、法曹界の門をくぐるのだが、この彼の変身に母方の祖父、ヘンリーの血が脈打つとする解釈がそれである。小説家の名前、ヘンリーは実はこの祖父にちなんだと言われる。<sup>4</sup> 法律用語に慣れ親しんでいたとか、法を司る事への親近感を保持し得たかも知れぬが、果たして祖父ヘンリー云々ただけ断言出来ようか。勿論、グールド家の一人娘であったヘンリーの母セアラが、ヘンリーが十一歳の折りに亡くなり、親権を巡る裁判ごたの挙げ句、<sup>5</sup> ヘンリーと弟妹達の扶養が祖母セアラ・グールドに委ねられ、

母の実家からの有形無形の影響を受けるようになった事は想像に難くない。「劇場封鎖令」が施行された後、劇作家フィールディングが縁者ゆかりの Middle Temple に入ったのも事実である。だがフィールディングの転向を単に祖父の血云々と定めるのは臆断にすぎず、母方の叔父や従兄弟の提言に乗ったと見る事も出来よう。弁護士への転出は手許不如意のフィールディングがとった便宜策、窮余の一策にすぎなかったと解釈可能である。母亡き後、グールド家とフィールディング家との近接の度合いに濃淡が生じた結果、識者の多くがフィールディングの祖母の保護を偏重した帰納的推理の結果とも考えられる。母方の祖父母の庇護を過大に評価するのではなく、英国国教会の牧師であった祖父ジョンの影を求め、フィールディングの作品からその宗派性、宗教的思考を探ってみたい。

## II

清教徒やカトリック教徒でなく、フィールディングが英国国教を遵守したのは、<sup>6</sup>父方の祖父の存在、貴族に組する家系故と定めてもあながち的外れではなからう。無論、ヘンリー八世以来この方、王族すべてが英国国教徒であり続けたかは英国史を紐解けば明らかで、貴族やジェントリーが王位継承と宗旨決定をめぐる抗争に明け暮れた事も度々であった。17世紀に貴族に叙せられた Denbigh 伯は Feilding と綴られるが、フィールディング家とは縁戚関係にあり、<sup>7</sup>代々、軍人を輩出したことから、保守派、王党派と考えられる。ヘンリーがスチュアート王朝支持派でないことは、彼が週刊の『ジャコバイト紙』(1747年12月から1748年11月まで発行)を主宰したことから明白である。ジャコバイトとはスチュアート王朝擁護、ローマ・カトリック教を標榜する一派の総称である。ハノウヴァー王朝の正当性を信じたフィールディングは同紙の名称とは裏腹に、ジャコバイト擁護に組みするのではなく、彼らの粗略さや愚鈍さを揶揄嘲笑するのである。フィールディングのジャコバイト諷刺、彼の反目の程は、『トム・ジョウンズ』第七卷第十一章で主人

公ジョウンズがジャコバイト叛乱軍鎮圧に向く政府軍に志願する事からも窺える。史実が小説の設定時期を解きあかさす訳だが、これはとりもなおさず作者フィールディングの関心の高さを物語り、彼の記憶から拭いがたき騒乱事件であったと言えよう。斯くして同書の執筆時期は1745年のジャコバイト叛乱の終焉後程なくと推測される。即ち、1746年6月から1748年11月頃と推定され、若僭王の記憶も生々しい頃であった。更なる例として、『トム・ジョウンズ』第六卷第十四章に於けるソファエアの父ウェスタン氏と叔母のウェスタン女史との口論から、ウェスタン氏がジャコバイトであることが判明するが、エキセントリックな彼の言動にスチュアート王朝やカトリック教徒諷刺が込められている。

英国国教会の牧師ジョン・ウエスレー等によって1729年にオックスフォードで唱えられた敬虔主義的な宗教運動は、監獄や貧民窟を布教地域に加えたこともあって、急速に支持の輪を広げていった。英国国教会の改革を視野に入れたメソヂスト教会の布教活動に対し、フィールディングは反発を隠しはしない。当時において、反メソヂストの風潮はフィールディングに限らず、ウォルポールやスモレット等の当代の文人達にも顕著であった。<sup>8</sup> フィールディングは自作の随所でメソヂズムに言及し、嘲笑的と化す。例えば、『ジョウゼフ・アンドリュース』第一卷第十七章でバーナバス牧師が紹介する本屋に対し、アダムズ牧師が自己の説教集出版をもちかける。本屋は“*but Sermons are mere Drugs. The Trade is so vastly stocked with them, that really unless they come out with the Name of Whitfield or Westley, or some other such great Man, as a Bishop, or those sort of People, I don't care to touch...*”<sup>9</sup>と答え、説教集の出版が昨今相次ぎ、採算に合わない云々と返答する。この不遜な本屋の言葉に、メソヂズム運動の創始者達であるウエスレーやホワイトフィールドの説教集の不人気さが強調されている。ホワイトフィールドの説教集への言及は『シャミラ』‘手紙その5’にも見られる。メソヂスト教の説教者の有り様が週刊誌『真の愛国者』の1746年4月8日号にも論及されて

いる。同様に、週三回発行の新聞『チャンピオン紙』の1740年5月24日の紙面には、『あの世への旅』に類する物語形式を借用し、語り手は暎府で偉大なメソディストに遭遇したとあるが、“He was desired to lay aside that vast quantity of religion.”<sup>10</sup>に続く文言は称賛とはほど遠い。『トム・ジョウンズ』第一巻第十章には、オールワージー氏の食客であるブライフィル医師の弟、ブライフィル大尉がオールワージー氏の妹ブリジェットと結婚するが、除隊後に聖書の研究を始める元大尉にメソディスト転向が窺えるとの箇所が挿入されている(63)。この様に、フィールディングによるメソディスト諷刺は枚挙に暇が無いほどである。

18世紀前半に英国国教会内に広教会主義が広まった。他の宗派にも指摘される、聖書を中心に据える信仰で、聖書を広く人間の合理主義思想の依りどころと捉え、道徳的人格主義を見いだそうとした。この宗教理念がホイッグ党支配下の世俗的政治分野で優遇されたのも、この広教会主義が英国内の平和と秩序を保守する上に好都合であったためである。<sup>11</sup> フィールディングの宗旨を巡り、彼が英国国教会広教会に帰依したとするのが通説である。かれの宗旨については拙論<sup>12</sup>で既に述べた故に詳述は避けるが、フィールディングの反カトリック、反メソディズム思考はとりもなおさず、彼の宗教心の発露であり、祖父ジョンゆかりの、英国国教の信者としての宗派性が示されていると推定する余地があろう。フィールディング若年の折りに野放図な一面が見られはしたが、敬神の情を示し、宗教理念は必ずしも深慮に基づいているとはいいがたいが、信心家である事<sup>13</sup>には異論は無かろう。

### III

フィールディングの交友関係や読書癖を辿ることも、宗教とのつながりを解く鍵となる。作家が自作に自己の知己を登場させる事は決して珍しくなく、フィールディングも例外ではない。フィールディングが描く作中人物の中でも牧師は多士済済、特異な役割を担っている。牧師の活動範囲は広範に及び、

その性格描写からも作者の宗教認識の程が窺える。フィールディングが知人を登用する典例として、『ジョウゼフ・アンドリュース』に田舎牧師として登場するアダムズ牧師が思い浮かぶ。粗忽で天真爛漫、純朴この上ない同師の雛形は William Young 牧師 (1702-57) とする説が有力である。<sup>14</sup> ヤング牧師とフィールディングの出会いは Dorsetshire の小村 East Stour で一時期を過ごした折りであった。同地に祖父ヘンリー・グールドが購入した別荘が在り、フィールディングは弟妹等と幼年期を過ごした懐かしい故郷であった。1734年11月にフィールディングは Charlotte Cradock と結婚するが、翌年2月にソールズベリーに住む義母クラドックが急逝し、彼女の遺産を元手に思い出深い東スツェールに居を構え、楽しき追憶の日々を享受する事が出来た。東スツェール滞在時期は劇作家としてのフィールディングの分岐点と重複する。即ち、1735年初頭に *An Old Man taught Wisdom* と *The Universal Gallant* が公表され、翌年1736年にフィールディングの劇作家としての活動が再開されるまでの一時を同地で過ごしたこととなる。この期に東スツェールの近在の村に、オックスフォード大を卒業して curate (代理牧師) として赴いた青年牧師ヤングと、フィールディングは出会ったと考えられ、忽ち肝胆合い照らす仲となった。学識はあるが、粗忽な同師との交友はフィールディングがロンドン上京後も続き、フィールディングの Lucian や Aristophanes の翻訳作業や『真の愛国者』や『ジャコバイト紙』編纂にヤング牧師は協力を惜しまず、『コヴェント・ガーデン紙』では記事収集から編集作業にも携わったと言う。<sup>15</sup>

他例として、『トム・ジョウンズ』に登場する神学者スワッカムは祖母セアラ・グールドと懇意であった Richard Hele 牧師 (1679-1756) と目される。同師は Britford の代理司祭を務める傍ら、ソールズベリー大聖堂の prebendary (聖堂名誉参事会員) に任じられた町の名士で、Cathedral Close にある学校の校長でもあったとされる。<sup>16</sup> アダムズ牧師と神学者スワッカムの実在モデルが如何にあったかは、本論の主旨を逸脱する恐れがあるので差し控えるが、いずれも幼年期や青年期での或る時期の体験をもとに、フィールディングの

脳裏に強烈に焼き付けられ、牧師や神学者の心証となった事は間違いなからう。

古典愛読に加え、フィールディングは祖父ジョンがかって司ったイングラント西南部、特にソールズベリーを基盤とする英国国教会広教会の聖職者達の説教集に慣れ親しんだ。そのこともあって、フィールディングの宗教理念は、18世紀当時の英国国教会広教会派のスポークスマンの存在であった Benjamin Hoadly (1676-1761) に Gilbert Burnet (1643-1715) や William Warburton (1698-1779)、さらに前世紀の英国国教会広教会派の指導者 Isaac Barrow (1630-77) 等に則ると考えられている。<sup>17</sup> ホードリ師は Winchester 主教で『トム・ジョウンズ』第二巻第七章に“a Hoadley” (105) の名で言及され、『ジョウゼフ・アンドリュース』第一巻第十七章に於いて、アダムズ牧師はホードリ師の説教集から引いて論陣を張る (82)。フィールディング自身も『真の偉大さについて』(1741) で同師の高僧振りを称賛している。バーネット師はソールズベリー主教で *The History of the Reformation of the Church of England* の執筆者としても知られる。バロウ師はフィールディングが信服する神学者、John Tillotson (1630-94) や Robert South (1634-1716) に Samuel Clarke (1675-1729) を加える学問僧の一人で、彼の陶醉振りは『アミーリア』で理神論者であるブースがバロウ師の説教集を読んで前非を悔い改め、改悛する顛末(511)に象徴される。同じく同書で、ドクター・ハリソンが与えるアミーリアへの忠告(374)は、バロウ師の名高い説教“The Being of God Proved from the Frame of Human Nature”を範としている。同師への言及はバテステインも指摘している如く、<sup>18</sup> 『トム・ジョウンズ』や『ジョウゼフ・アンドリュース』等にも見られる。ティロットソン師は Canterbury 大主教で雄弁な説教者としても知られ、『トム・ジョウンズ』第三巻第九章に彼の説教集への言及が見られる(145)。『アミーリア』にも同師の説教“The Justice of God in the Distribution of Rewards and Punishments”等を念頭に置いた箇所も少なくない。<sup>19</sup> 同様に、サウス師の“復讐”に関する説教が『アミーリア』でドクター・ハリソンの意見

として表明される(391)。クラーク師は18世紀前半の英国国教会広教会派の指導的の神学者で、フィールディングの『チャンピオン紙』や『コヴェント・ガーデン紙』で他の神学者と並び賞されている。忘れてならないのが、Anthony Ashley Cooper, 即ち Shaftesbury 伯(1671-1713)であろう。<sup>20</sup> 本論一章に引用された『トム・ジョウンズ』の一節はシャフツベリー卿の“An Inquiry concerning Virtue or Merit”の原文を模したものとと言われる。同卿は『トム・ジョウンズ』第五巻第二章や第八巻第一章にも登場する英国の倫理学者で、『ジョウゼフ・アンドリュース』の序文にも言及される事から、フィールディングの傾注の度合いを推し量る事が出来る。

#### IV

フィールディングが描出する聖職者の姿に、彼の宗教心が少なからず反映されていると考えられる。当時の宗教界の流行で牧師達の説教集が盛んに印刷・出版され、自己の説教の原稿をロンドンに携行し損なうアダムズ牧師のエピソード(II; ii)にも窺えるが、この事が一般社会での信仰の高まりを必ずしも表さない事は申すまでもない。フィールディングが説教集を問題とするのは、キリスト教の教義・教典や宗教問答に彼が興味をそそられたのも事実だが、当代の宗教界の実態への疑問と捉える見方もあろう。市井の聖職者の実態に、理想と現実の深層構造が露呈し、聖職者の言葉と遊離する牧師達の実態に覆いがたいギャップがあったものと推定される。フィールディングが思い描く理想的な牧師像をつとめるのがアダムズ牧師であり、その雛形と言われるヤング牧師を中心とした田舎牧師が核をなす。都会の、ロンドンの牧師でないのがミソで、『トム・ジョウンズ』や『ジョウゼフ・アンドリュース』の大団円や登場人物の顛末に示唆される如く、田園賛歌、自然崇拜に対する人為性の拒否、都会悪への作者の姿勢を呈示していると思われる。無論、当時の田園であれ都会であれ、窮境に甘んじる清廉潔白な牧師を数える事もあれば、全く正反対の生臭き牧師も介在したに相違ない。さらに物語で垣間



見られる牧師姿と現実とは差異が存在する事も否定できない。世相に写る牧師の認識を考えるに、ヨークの田舎牧師スターンが *Tristram Shandy* で一躍文壇の寵児となった例をとるが、同作品の奇抜さ、独創性ばかりが世の注目を集めた訳ではなかろう。やはり物語巻頭の章と作者の僧籍がロンドンを中心とする上流社会の感興を殊更に呼んだことは間違いない。スターンの聖職者としての資質に関し、D.W. Jefferson は次の様に記している。

What can be said of his character as a clergyman? It is difficult for us to appreciate the motives with which, in this period, men like Swift and Sterne entered the Church: they seem to have had no special insight into their religion, no overmastering sense of vocation. Both of these clergymen had a distinctly secular turn of wit.<sup>21</sup>

権勢欲や名誉欲が政治家ならずとも、聖職者にも全く無縁でないことは、スウィフトの行動パターンを辿ると明白である。ジェファソンの疑念からも分かるように、スウィフトやスターンが聖職に就き得るという社会状況が、当時の宗教界の実体を如実に物語ると解釈可能かもしれない。18世紀当時、ジェントリーの居候的存在であった次男、三男等の職探しは、学問が出来れば牧師に、そうでなければ軍人の選択しか残されてはおらず、その職に適合し得ない事態も当然生じたものと考えられる。厄介払い同然に、長男が弟達に軍人職をあてがう事も決して珍しくなかった。こうした便宜主義はなにも軍籍に限らず、フィールディング自身が1748年10月にウェストミンスター地区の治安判事に任命された事にしても、『トム・ジョウンズ』巻頭に献呈の辞が奉ぜられた George Lyttelton (1709-73) の推挙があってこそ実現した代物である。何時の時代にも政財界、官界、宗教界等を問わず、遊弋するにはそれなりの知遇を得なければならぬらしい。

牧師が営農の指導員であることは、村落共同体での数少ないインテリで

あったが故と思われる。民衆の生活改善には農業改革が至上の命題で、glebe (教会所有の土地)の活用に迫られた事とも無関係ではない。折から第一次エンクロージャの終盤にあたり、ソールズベリー近辺にも農業近代化の流れが押し寄せた。こうした状況下、下級牧師が収入増加を目論み、自らの荘園経営を目指す動きは理に適い、極めて当然の利殖行為と考えられた。<sup>22</sup> スウィフトには夢想だに出来ぬ事だが、スターン自身、ヨーク郊外の任地で家禽飼育を始めとした農業経営に精出したが、旨くいかず、文学転向を図ったと聞く。<sup>23</sup> 『ジョウゼフ・アンドリュース』に即物論者として登場するトラリバー牧師は、アダムズ牧師を誤解して彼を養豚場に案内して一騒動を起こす。馬にも乗らぬアダムズ牧師の旅姿が誤解を生んだのである。聖職者は馬車、少なくとも馬に乗るとする世間の常識から徒歩で旅するアダムズ牧師が逸脱している訳だが、外見でしか人を判断出来ないトラリバー牧師は “if Parsons used to travel without Horses?...for I assure you, I don't love to see Clergymen on foot; it is not seemly nor suiting the Dignity of the Cloth.” (164) と牧師の世間体を口にする。貧相な身なりから宿屋の主人にも誤解される始末だが (II,iii), これも無理からぬ事。アダムズ牧師は齢50歳の parson (教会区司祭)ではあるが、年額23ポンドの聖職禄で細君と6人の子の扶養に四苦八苦する代理牧師である。『アミーリア』でヒロイン達の助言者として登場するドクター・ハリソンは、ソールズベリー近在で民衆の生活改善に尽力する、清廉潔白でユーモアを解する田舎牧師である。アミーリアの夫ブースが除隊後、ソールズベリー近郊で近代農法を試みるが、ブースの農業経営を指導・助言したのは他ならぬドクター・ハリソンである。このドクター・ハリソンの雛形が祖父ジョンと目されるが、<sup>24</sup> 同牧師の援助をもってしても、軍人上がりのブースを農業に専念させようにも、所詮陸に上がったカップパ同然。計画は画餅に帰し、負債を抱えたブースは咎を逃れようと、妻子を捨ててロンドンに出奔する始末。夫を求めてロンドンに上京するアミーリアは同地で運良く夫との再会を果たすが、自堕落な夫の数々の不始末に泣かされる。ヒロインの精神

的な支えとなり、プースへの物心両面の助言者として貢献する聖職者ハリソンの姿に、当代の英国での理想的聖職者像、彼の尽力振りが当時の農業実態を髣髴させる。『アミーリア』ではドクター・ハリソンは独身者として描かれているが、アダムズ牧師に代表される如く、下級牧師達は貧乏人の子沢山を文字どおり実証する存在と言えた。自活もままならぬ聖職者の生活の術は、権力者の庇護にすぎるか、或いは食客然となる以外に策は無く、『トム・ジョウンズ』に登場するサプル牧師に象徴される。ウェスタン氏の食客で健啖家のサプル牧師は上戸で喫煙家、ウェスタン氏のお供で狩りに興じる chaplain (礼拝堂付き司祭) である。しかし同師はオールワージー氏の村の代理牧師を兼ね、モリーがソファイアの古着を着用して一騒動を引き起こす教会で説教をなすのが、このサプル牧師である (IV,vii,x)。同師の強腕ぶりは、ソファイアがジョウンズを思慕して親の意にそわぬ事に腹を立てたウェスタン氏が、当の相手に挑みかかろうとするのを阻止する場面にも窺える (VI,ix)。サプル牧師同様、パイプをくゆらせ、狩りに興じて痛飲する田舎牧師として『シャミラ』に登場するのがウィリアムズ牧師で、彼のドン・ファン振りからサプル牧師とは対照的な破戒僧である。さらに『ジョウゼフ・アンドリュース』で英国国教会高教会派の教条主義者を認じるバーナバス牧師の快樂趣向 (I,xiii) に示唆される下級牧師の生活描写から、当時の宗教界の現状のみならず、フィールディング自身の牧師観を窺うことも可能と申せよう。

## V

フィールディングは牧師達の現状を如何に見たか、この観点から作品を考えて見ると、奇妙な符合に気がつくであろう。しかも脇役的な登場人物の弁に示される。『トム・ジョウンズ』で主人公はモリーと仮初めの恋を結ぶが、モリーの母は娘が村人の物笑いの対象となることは我慢ならず、“For poor as I am, I am a Gentlewoman. And thof I was obliged, as my Father, who was a Clergyman...” (185) と口惜しげに語っている。同様の視点から、ソファイア

の侍女のオナー女史は自らの素性の良さを、“...I am a Christian as well as he, and no-body can say that I am base born, my grand-father was a Clergyman...”(205)と聖職者との縁続きを誇らしげに語る。他例として、ロンドンでジョウンズが滞在する下宿屋の女将ミラー夫人は未亡人で、前夫が牧師であったという(757)。ミラー夫人の長女ナンシーと下宿人ナイティンゲールの情事が発覚し、間に入って画策するナイティンゲールの叔父は、田舎に残した当人の娘であるハリエットが、無一文の青年牧師と出奔したとの報に茫然自失の体たらく(814-5)。任務を放棄して早々にロンドンを後にするが、故郷で叔父を迎える妻は貧乏牧師の娘であった(775)。さらに、『アミーリア』で、ベネット夫人は牧師と結婚するも25歳で未亡人となる云々と、同夫人はアミーリアに自らの生い立ちを明らかにする。その彼女の口から“*I was the younger of two Daughters of a Clergyman in Essex.*”(268)との事実が明らかにされ、母の不慮の死による父の再婚、継母等に引き起こされる不幸な家庭環境、貧窮生活を強いられる牧師の生活振りが語られる。

フィールディングが登場人物に近親者と聖職の因果関係を語らせる真意は何処にあるのか。しかもその大半は下級牧師とその家族のよすがを俛ばせる筆法に則っている。彼らの悲劇、薄幸な人生の背後に牧師の薄給という事実が隠されていると言えよう。現実社会では一部を除き、大多数の牧師とその家族は極貧生活に喘いでおり、下級牧師の生活改善の意図、社会啓蒙の意がその行間に込められているのではないか。『シャミラ』の破戒僧ウイリアムズが出し抜いた、当のブービー氏に聖職禄の推挙を得ようとする条りに、また『トム・ジョウンズ』のサプル牧師の立場から、牧師の栄達はひとえに為政者、権力者の胸先三寸にかかっていたようである。それは英国では領主が庇護権を有すると共に、牧師の推挙権を保持していた事に由来する。小教区の職位と収入を保証する土地財産は不可分で、この二つが聖職禄と考えられ、その保持者が小教区の牧師である。従って、封建領主と騎士の主従関係にも似た、領主が封土としての聖職禄を付与する関係が生まれる。<sup>25</sup> 才覚ある下級

牧師が、自らの逆境を改善しようと立身出世を夢見ようにも、この様な現実を前にしては、教区の兼任を取り付ける程度が関の山、ジョン・フィールディング同様の立身出世を果たすことは至難の業であった。

## VI

何らかの契機、因縁が作者をして宗教や聖職者に対する関心を呼び覚ましたとしても不思議ではない。教会の権威が衰え、民の信仰にかげりが見えたとは言え、フィールディングの時代に婚姻や宗祀をめぐる、親族の果たす役割は現在よりはるかに大きかったと考えられる。貴族の係累に組みするフィールディング家にあつて、英国国教を准じ、現国王に忠誠を誓うことが家の保全をはかる上で至上命題であつた。当主の短慮から、闇雲に軍人を輩出して来た訳ではない。家の宗教の強制が内包する諸問題をジョイス等の二十世紀の小説家が解き明かしているが、当時の英国にあつて、本人の宗旨決定に至る過程で家庭環境が果たす役割は大きい。家庭環境に纏わる点で、フィールディングの評伝作家達がグールド家の影響を過大に評価する傾向が見られるが、同時にフィールディングの宗教心を育むに、祖父ジョンが果たした役割も無視されてはなるまい。無論、祖父が直接手ほどきを施したなど、当の祖父ジョンが1698年1月31日に50歳で亡くなっていることから論外である。<sup>26</sup>一方、祖父ヘンリーは1710年3月26日に67歳の生涯を閉じている。<sup>27</sup>祖父ヘンリーにしても、孫のヘンリーが1707年4月22日に誕生している事から、孫に決定的な影響力を及ぼした等とは考えにくい。実際、祖父の思い出など二、三歳の幼児には皆無であろうし、断片的な記憶が残りこそすれ鮮明さに欠けるのは必定である。まして住居を違えておれば、多忙な祖父が接する機会も限られたものと想像される。その意味では祖母セアラ・グールドの方が遥かに影響力を行使し得たと言えよう。娘のセアラ亡き後、ヘンリーをはじめとする孫の養育権や東スツールの地租の扱いをめくり、娘婿エドモンドと軋轢が生ずるが、エドモンドの後妻 Anne Rapha がカトリック教徒

であったことから、アンの影響力を懸念しての老婆心とも解釈される。<sup>28</sup> フィールドイングのイートン校入学はエドモンドが義母の干渉を排する意図らしく、裁判沙汰の挙げ句、養育権は祖母グールドに帰するが、このイートン校でギリシャ、ローマの古典に彼が殊の外慣れ親しんだとされるから皮肉なものである。後に1728年3月にLeyden大学に入学するが、翌年8月に同大学を退学していることから、イートンからロンドンの演劇界に投じたフィールドイングの文人としての素地が磨かれたのは、1719年から1724年にかけてのイートン校時代と目されよう。フィールドイングの後半生を縁取ったのは、小説家としての名声と同時に治安判事としての社会貢献であった。この彼の活躍をして、血筋は争えぬとして研究諸子の脳裏に浮上するのが、祖父ヘンリーとの因果関係であろうが、果たして祖父ヘンリーだけなのか、とするのが本論の端緒である。

社会改革者を思わせるフィールドイングの治安判事振りから、信仰にも似た信念が感じとれる。その一環として生まれたのが1753年1月の *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor, for Amending their Morals, and for Rendering them useful Members of the Society* であろう。そこには法律論に縛られた治安判事の姿は窺えない。宗派性を越えた信仰者、英国国教会広教会派としてのフィールドイングの信条が結実を見たと見えよう。この点で、彼の宗教理念とメソディズムが何故相容れなかったのだろうか、疑問は残る。犯罪の増加を憂え、改善策を提示する治安判事の信条に殊更反するとも考えられないが、アダムズ牧師の弁を借りると説明がつく。アダムズが本屋を交え、バーナバス牧師と説教集を巡る議論の中で、英国国教会内の腐敗、豪壮な館で美食三昧の上位聖職者の暮らし振りは目に余る、とするホワイトフィールド師の主張に同師は理解を示す。現状に改革のメスを入れることは吝かではないが、アダムズ牧師の言葉“but when he began to call Nonsense and Enthusiasm to his Aid, and to set up the detestable Doctrine of Faith against good Works, I was his Friend no longer.” (82) に、フィールドイングの意趣が隠され

ていると言えよう。

フィールディングの宗教心は自作に登場する牧師達にも反映されている。英国国教会広教会派の一員として、フィールディングは他宗派、特に英国国教会高教会派への批判も忘れない。バーナバス牧師は教条主義的言動と奢侈に流れる生活振りから、英国国教会高教会派の牧師として、また墮落の象徴として、破戒僧ウィリアムズはメソヂスト牧師として描出される。一方、対照的な牧師がドクター・ハリソンであり、謹厳実直な人柄は信頼感を醸し出すが、諧謔性に乏しく面白味に欠けることは否めない。フィールディングの理想的牧師の規範はアダムズ牧師に示唆される善良さと清貧さにあり、私腹を肥やす高禄の聖職者と貧しさに喘ぐ聖職者の家族を対比させ、後者の救済をはかる。いずれの宗派にあっても、下位聖職者の処遇はお粗末極まりない。高禄をはみ、生活は奢侈に流れ、特権を振りかざしては、世間の批判にも傲慢な態度に終始する高僧達。一方、アダムズ牧師の粗忽さ、聖職者にあるまじき低俗さが読者の感興を呼び、この利権争いとはまったく無縁の彼の姿に、管轄の民の生活に心を砕き、寝食を忘れて邁進する下位聖職者の姿が写される。社会改革者として、聖職者を中心に据えて、彼らの生活振りを描くことによって、フィールディングは社会の現状と生活苦に負けない聖職者の姿を描写する一方、救貧施策の一環として牧師の処遇改善を謳っていると解釈できる。英国国教会内部からの宗教改革の色彩を帯びたメソヂズム運動へのフィールディングの姿勢に、英国国教会の聖職者である祖父の介在が無いとは言えず、国教徒としてのフィールディングの精神的バックボーンとして存在したのではなかろうか。祖父ジョンの存在を単に宗教面から捉えるのではなく、フィールディング若年の折り、無神論者或いは理神論者とも噂された事実から、<sup>29</sup> 他派への改宗に至らしめぬ“くびき”ではなかったか。治安判事任用に先立ち、英国国教会の教義を遵守し、国王への忠誠を誓ったフィールディングは、<sup>30</sup> あらためて祖父ジョンが国教会の高位聖職者であった事を認識したことであろうし、彼の宗派性を方向づけた一助となり得たと

推計する事も可能であろう。

註

- 1 Henry Fielding, "The History of Tom Jones," *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Fredson Bowers (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1966), 128. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 2 Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952) 1:3; Wilbar Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell, 1963), 1:10-3.
- 3 朱牟田夏雄, 『フィールディング』(東京:研究社出版, 昭和55年 [1980]), 3.
- 4 Martin Batestin, *Henry Fielding A Life* (New York: Routledge, 1989), 19-23.
- 5 Dudden, 1:9-10.
- 6 拙論, 「Tom Jones の宗教性をめぐって」『同志社大学英語英文学研究』43 (同志社大学人文学会, 1987), 38-41.
- 7 Batestin, *Henry Fielding A Life*, 7.
- 8 Dudden, 1:270. n.1.
- 9 Henry Fielding, "Joseph Andrews," *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Martin Batestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1967), 79. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 10 Henry Fielding, "The Champion," *The Complete Works of Henry Fielding*, ed. William Henley (New York: Barbes & Noble, Inc., 1967), 15: 319.
- 11 小嶋潤, 『イギリス教会史』(東京:刀水書房, 昭和63年 [1988]), 207.
- 12 拙論, 「Abraham Adams 牧師の系譜—Joseph Andrews を中心に—」『同志社大学英語英文学研究』41 (同志社大学人文学会, 1986)
- 13 Dudden, 1: 269.
- 14 Dudden, 1: 354; 372; Cross, 1: 176; 344-7.
- 15 Dudden, 1: 523; 553; 2: 890-1; Batestin, *Henry Fielding A Life*, 188-9; 558-60.
- 16 Dudden, 1: 141; 2: 646-7; Cross, 2: 168.
- 17 Batestin, *Henry Fielding A Life*, 344; Henry Fielding, "Amelia," *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Martin Batestin (Oxford: Clarendon Press, 1983), 37. n. 4. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 18 Martin Batestin, *The Moral Basis of Fielding's Art* (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1967), 30-9.
- 19 *Amelia*, 31. n. 3.



- 20 拙論, 「*Tom Jones* の宗教性をめぐって」, 22-3.
- 21 D. W. Jefferson, *Laurence Sterne* (London: Longman, Green; 1968), 9.
- 22 cf. John H. Pruett, *The Parish Clergy under the later Stuarts* (Chicago: Univ. of Illinois Press, 1978)
- 23 Wilbur Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York: Russell & Russell, 1967), 163.
- 24 Cross, 2: 330-1.
- 25 塚田理編, 『イギリスの宗教』(東京: 聖公会出版, 昭和55年 [1980]), 97.
- 26 Battestin, *Henry Fielding A Life*. 10; Dudden, 1: 3. バテステインは1697年とも1698年とも決めかねている。
- 27 Battestin, *Henry Fielding A Life*, 7.
- 28 Dudden, 1: 8-10.
- 29 Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art*, 11: 171.
- 30 Cross, 2: 98.

## Synopsis

### The Background of Fielding's Religious Faith

Tatehiko Noguchi

On the question of family ties, Fielding's ancestry gives an explanation of some qualities which distinguished the novelist later. His father's side was of aristocratic origin after the acquisition of earldom of Denbigh in 1622, and his father Edmond a colonel, and his grandfather, John Fielding one of the leading clergies of the then English Church. On his mother's side, it might be said, Fielding was indebted for his taste of law to his grandfather, Henry Gould who was a justice of the Queen's Bench. There might have been few literary critics and biographers of Fielding who would make reference to his father's side; most of them would comment that his change of occupation from a dramatist to a lawyer seems to be due to the influence of his mother's side, especially in the case of Fielding being forced to stop writing dramas by the Licensing Act in 1737. It may be impossible for a grandfather to have some effect on his grandson in letting his kin follow his vocation. As an example of failure may be cited the fact that grandfather John failed in getting his son Edmond to be an Anglican priest even the given father-son relationship. Whatever intention the two grandfathers of Fielding might or might not have had, neither side should be emphasized as some literary biographers of Fielding have done regarding the effect of the blood relation.

In terms of the religious models on which Fielding draws, it may be said that the author is much concerned about the living condition of the English clergies, especially of that of the lowest rank. It is during the time of his

service in his later years, as a justice of the peace of Westminster and Middlesex, that Fielding dedicated himself in order that justice might be done, being tempered with mercy. One may attribute his persistent efforts to his Christian faith, especially as that of a latitudinarian. Judging from the treatment of Parson Adams in *Joseph Andrews* as a poor country vicar with a pure and simple heart, it may be true that to cite an exact opposite case Fielding depicts the vanity of a high-ranked clergyman who has been corrupted in his living. To protect the family of a low-rank clergyman with small income, Fielding illustrates in his works how poor a country clergyman is and how miserably his family spends their lives. Strangely enough, Fielding criticizes methodists who have propagated especially among the poor and around the slums in Fielding's time. In depicting such English clergies as Parson Williams in *Shamela* or Parson Trulliber in *Joseph Andrews*, who plays the part of a methodist or the part of a mercenary parson, Fielding satirizes their vanities and hypocrisies and warns the English people against extravagance in living. What seems clear in his handling of a vicar or a curate like Parson Adams, Parson Barnabas in *Joseph Andrews*, and Parson Williams in *Shamela* is that Fielding has an intention of criticizing not only methodism but also Catholicism of Jacobites who wished a descendant of King James II to be the king of England. Though Fielding was once misunderstood to be an atheist or a deist in his youth, Fielding had faith in latitudinarianism of the Church of England. In view of his attacks against methodism and Catholicism, we are tempted to conjecture that there is considerable justification for Fielding to make an open attack on Catholicism and methodism, being conscious of his grandfather John, who once was a high priest of the Anglican Church.